

論文

芸術家とアイデンティティ・ワーク

——新たな演劇人研究に向けた理論的準備——

柴田 惇 朗*

1. はじめに

本稿では「アイデンティティ・ワーク」概念を手がかりに、芸術家アイデンティティの確立・維持の要因とプロセスを芸術生産の形の違いに着目して検討する。まずアイデンティティ・ワーク概念を要約し、一般的なアイデンティティの構築・維持の要因とプロセスがいかなるものであるかを考える（2章）。次に芸術家のキャリアをアイデンティティ・ワークの視点から捉え、芸術家のアイデンティティ・ワークの先行研究の事例を用いて検討する（3章）。さらに芸術生産の形によって特有の異なるアイデンティティ・ワークが必要である可能性を提示し（4章）、最後に「演劇人」という特定の芸術形式を追求する芸術家のアイデンティティ・ワークに固有な問題を考察することで今後の演劇人研究の一つの方向性を示す（5章）。

2. アイデンティティ・ワーク概念

2.1 社会学における（芸術家）アイデンティティ

エリクソン以降、アイデンティティは社会学においても頻繁に議論されてきた。その過程で、アイデンティティは古典的なライフコースの過程で達成されるべき段階の理論としてではなく、断片的、流動的、再帰的な自己の語りの理論として理解されるようになっていく。

Zygmunt Bauman (2004=2007: 38) はリキッド・モダンな社会において、「私たちを取り巻く世界は、ほとんど秩序を欠いた断片と化している」と説明しているが、上記のアイデンティティ観は Bauman 的な社会分析と親和的である。別稿では「リキッド・モダニティとは新奇さと無駄、あるいは根源とゴミ捨て場の間の距離と時間が劇的に縮められた状態である」と説明している (Bauman 2007: 122)。機能的な差異よりも新しさそのものを恒常的に求め続ける状態が加速した結果、何かの創造が自動的にそのものの破壊を意味するようになる。リキッド・モダンにおいて「…時間は流れるが経過しない。一定の変化があるが、終わりはない」く、「絶え間ない新しいはじまり」が続いていく (Bauman 2007: 121)。

現代的なアイデンティティもまた、「絶え間ない新しいはじまり」によって特徴づけられる。人々はアイデンティティを問い続け、語り続けなければならない。「自己による自己の構築は、いわば必然である…自己を確証することは不可能である」(Bauman 1988: 62)。本稿ではこのような達成し得えない、流動的なアイデンティティの構築プロセスを想定した上で、Steph Lawler (2015: 7) に依り、アイデンティティを「役割やアイデンティティ・カテゴリーと呼ぶ公的な表現と、人々が持っている自分が何者であるかをめぐり個人、両義的、反映的かつ再帰的な感覚の両方」と定義づける。この定義はアイデンティティを社会的な関係性の中の「表現」と自身による再帰的な「感覚」の両輪で理解するものである。表現と感覚はいずれも達成されることなく、恒常的に構築され続ける。

キーワード：アイデンティティ・ワーク、芸術家、演劇人

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2019年度入学 公共領域

このような概念の理解は、アイデンティティ・ワークを巡る議論の礎となるものである。

「芸術家アイデンティティ」に関しても本稿の立場を述べておく。芸術家カテゴリーは多義的かつ不明瞭であり、今まで様々な定義付けが試みられてきた。Lena & Lindemann (2014: 71-74、訳は高橋 2019: 72 に準拠) では先行研究から以下の定義の5類型を抽出している。

1. 人的資本：学歴、訓練、技術などの蓄積が基準
2. 国勢調査：国勢調査におけるカテゴリー化が基準
3. 創造産業：「創造的」な領域での就業が基準
4. 創造環境：「創造的」な地域への居住・移動が基準
5. 主観：芸術家という自認（＝芸術家アイデンティティ）が基準

1-4に該当する研究において「芸術家」は独立変数として用いられており、そのためにこれらの操作的な、外形的な基準を用いた、網羅的ではない定義がなされている (Lena & Lindemann 2014: 74)。反面、5の定義は「芸術家」をアイデンティティ・プロセスの帰結として用いている点が特徴である。アイデンティティ・ワークも5の定義、すなわち従属変数としての芸術家を想定している。したがって、本稿でも5の定義を用いた上で、各人にとって（ひいてはその芸術家が参与するアート・ワールド¹において）芸術家とはどのようなカテゴリーであり、芸術家アイデンティティの達成のためのプロセスがいかなるものかに着目して分析を行う。

2.2 アイデンティティ・ワークとは何か

アイデンティティ・ワークは経営論・組織論の分野で発展してきたアイデンティティ論である (Brown 2015: 21)。本稿では Sveningsson & Alvesson (2003: 1165) の定義、「人々が首尾一貫性と特殊性の感覚を生み出す構造の構築、修復、維持、強化または修正を行うこと」を採用する。この特徴は、アイデンティティ・ワークの対象を「(主観的な) 首尾一貫性と特殊性の感覚」としてのアイデンティティと捉え、その感覚がアイデンティティ保持者の主体的な活動によって作られ、維持されると主張している点である。

アイデンティティ・ワークの分析対象となるのは発話行為としてのナラティブであることが多い (Ibarra & Barbulescu 2010; Beech et al. 2012)。ただし、個人によるアイデンティティ・ワークは発話にとどまらず、見た目や関係の選択などもこれまで研究の対象とされてきた (Brown 2015: 26)。本稿ではナラティブ・ワークに限定せずに先行研究を検討する。

ここまでの説明は Lawler の定義における「表現」よりも「感覚」を重視したものであるが、アイデンティティ・ワーク論においてアイデンティティは関係性の中で現れるものと捉えられており、「表現」もその分析の対象として重要である。例えば、Lepisto et al. (2015: 30) はアイデンティティ・ワークを「主張」と「受け入れ」のプロセスと捉え、主体性を主張側だけでなく受け入れ側にも付与する必要があると述べている。すなわち、芸術家を自認することは芸術家であることを保証せず、その主張の受け入れが同業者や観客などに受け入れられて初めてそのアイデンティティが成立する、ということである。

2.3 アイデンティティ・ワークはどのようなプロセスか

アイデンティティ・ワークはなぜ起こるのか

Vignoles et al. (2006) はアイデンティティ・ワークが行われる理由を「誘因」概念を用いて説明している。誘因とは「特定のアイデンティティ状態を志向し、またその他の状態から離れようとすることでアイデンティティ構築を方向付ける力」である (Vignoles et al. 2006: 309)。「自尊心」、「連続感」、「本来感」、「弁別性」、「所属感」、「効力感」、「首尾一貫性」、「意味」などが誘因として挙げられる。例えば「自尊心」は自身に対する肯定的な認識を維持・拡大したい欲求を指し、自身の芸術家としてのステータスに懐疑を向けられるなどは「自尊心」を刺激する契機となりうる。これらの誘因がときに相互に矛盾しながら特定の文脈において志向されることがアイデンティティ・ワークの前提となる (Lepisto et al. 2015: 19)。

誘因の複数性を Kreiner et al. (2006) は Marilynn B. Brewer (1991) の「個人的アイデンティティ」と「社会的アイデンティティ」を用いて説明している。個人的アイデンティティは近接する他者との差異によって構築され

る自己、社会的アイデンティティは集団への所属によって構築される自己で、それぞれが流動的なプロセスである。個人は両アイデンティティの「最適バランス」、すなわち「特定の社会的アイデンティティに対して、差異が強調されすぎも独立的すぎもせず、同時に内包されすぎも依存的すぎもしない状態」を志向する (Kreiner et al. 2006: 1033)。「表現」と「感覚」のバランスとも換言できるこの相反する欲求同士が拮抗するプロセスの中で、上記のさまざまな誘因が生み出されるのである。

アイデンティティ・ワークはいつ起こるのか

アイデンティティ・ワークは「引き金」となる出来事によって引き起こされる (Lepisto et al. 2015: 18)。引き金とは「安定した環境での自己同一性の日常的な再生産が止まる」要因となる「不確実性、不安、疑問、または自己不信」などを指す (Alvesson et al. 2008: 15)。例えば Ibarra & Barbulescu (2010) はアイデンティティ・ワークが行われる状況として「職業役割の移行期」に注目している。中でも役割の移行が「過激、非制度的、社会的に望ましくない」とされる場合、アイデンティティ・ワークに繋がりがやすい (Ibarra & Barbulescu 2010: 138-140)。このような判定がなされるのは正規雇用の者が非正規職に移行する場合などである。このような例は不安定な状況で自身のアイデンティティを他者に提示しなければならないような場面が引き金であることを示している。

Lepisto et al. (2015: 18) は複数のアイデンティティ・ワーク研究をレビューし、引き金を「コンテキストの変化」と「『強い』状況」と大きく2つに分類している。前者は場所の移動などによって関係性などの連続性が失われることでもたらされ、本来感や連続感といった誘因を刺激する。前述の Ibarra & Barbulescu (2010) の例などがこれに当たる。後者は期待や圧力のかかる集団・職場の中などに見いだされ、本来感、自尊心、自己効力感といった誘因と関係する。例えば参与する芸術家が正統性の強く要求される特定のアート・ワールド (Bain (2005) が提示する「神話」によって駆動される視覚芸術界など) は「『強い』状況」と考えることができるだろう。

ただし、Lepisto et al. (2015: 23-26) はこの類型化は便宜的なものとしており、実際に「プロフェッショナル・アイデンティティ」に固有の引き金として「脱専門家化」、「管轄権争い」、「価値転移」を新たに提案している。脱専門家化は秘教的な知識の大衆化、簡易化、脱神秘化がプロフェッショナル・アイデンティティへの脅威となるような状況を指す。管轄権とは「抽象的な知識で人間の問題を定義、指示、治療、または推論する」排他的な権利を指す (Lepisto et al. 2015: 24)。管轄権の主張はプロフェッショナルの条件であるため、それを巡る争いが引き金となりうる。価値転移は利己的利益を超えた職業への献身を指し、「意味」の実現がプロフェッションを駆動する大きな誘因であることを示している。詳しくは後述するが、特に集団創作が基本である演劇などの芸術形式においては、細分化された領域の秘教的な知識を有し (演出家、作家、俳優など)、その知識をベースとした管轄権の主張が行われ (演出家は演出に関する最終決定権を主張する)、多くの場合献身的に芸術に尽くす (多くの演劇人は身銭を切って活動している) といった、多くの共通点が想定される。また、この他の固有の引き金が芸術生産の事例研究を通じて浮かび上がる可能性もあるだろう。

アイデンティティ・ワークはどのように起こるのか

アイデンティティ・ワークのきっかけとなる引き金に対しては、様々な「戦術」が用いられる (Lepisto et al. 2015)。戦術とは「アイデンティティの要求や緊張に対する…意識的に発動される戦略や装置」である (Kreiner et al. 2006: 1042)。アイデンティティ・ワークは前述の通り個人的アイデンティティと社会的アイデンティティのいずれかが損なわれた、もしくは両者の間での「最適バランス」が崩れた際に行われるが、戦術はこのような場合に用いられる。

前者の場合、個人や集団の中で複数アイデンティティのマネジメントが問題となる。個人アイデンティティ・ワークの典型例が Taylor & Littleton (2008) にあらわれている。ある視覚芸術家は「芸術に対立する金銭的報酬」の語り (芸術を追求するにあたって金銭的報酬は見込めない) と「常識と責任」の語り (金銭的報酬が得られる職に対して責任を保つ必要がある) という2つの語りのレパートリーを用いながら、芸術家としての正統性と金銭的報酬が得られる機会のバランスをとっていた。

集団アイデンティティ・ワークの分析としては Pratt & Foreman (2000) による4つのマネジメント戦略の類型

が挙げられる。各戦術は「区画化（アイデンティティ間の相互作用を行わない複合的アイデンティティの維持）」、「削除（特定のアイデンティティの削除）」、「統合（複数のアイデンティティを一つに統合）」、「集積（アイデンティティ間の相互関係を取り結びながらの複合的アイデンティティの維持）」と呼ばれる。区画化の例として挙げられているのは「チャリティ」としての病院、「プロフェッション」としてのクリニック、「ビジネス」としての保険会社が同居しながら独立している管理医療機関である（Pratt & Foreman 2000: 26-27）。もし、この内の一つをなくせば削除、2つを一つのアイデンティティにまとめれば統合の類型が当てはまる。集積は複数のアイデンティティ間で協力して特定コンテキストに合わせた顔をその都度戦略的に見せる場合や、統合的な「神話」を用いて「管理教育機関」としてのアイデンティティのもとで統制される場合に当てはまる。

「最適バランス」の維持のためバランス維持戦術が用いられる（Kreiner et al. 2006: 1044-1045）。この研究は監督教会の司祭たちが経験する「アイデンティティ要請」（特定のアイデンティティを方向づける外圧）と「アイデンティティ緊張」（個人的／社会的アイデンティティ間の相互作用によって引き起こされるストレスの経験）をインタビューを通じて抽出したケーススタディである。司祭たちが経験した要請には「司祭の職を天職と捉えること」「教区民から『司祭らしい』振る舞い（非キリスト教徒への糾弾など）を求められること」など、緊張の例としては「『聖職服を着て寝る』ほどの過剰アイデンティフィケーション」「個人的アイデンティティの司祭らしからぬ部分（後ろ向きな性格など）を是正するプレッシャー」などが挙げられた（Kreiner et al. 2006: 1039）。

このような引き金に対して、司祭たちは「距離化の戦術」「統合の戦術」「中立的／二重機能の戦術」という3つの戦術を用いて対処していた（Kreiner et al. 2006: 1044-1045）。距離化の戦術は「家では仕事のことを忘れるように務める」「家族や自分など、仕事よりも優先すべき次項を自分な中で明確化する」などの仕方で個人的アイデンティティを社会的アイデンティティから遠ざける戦術である。統合の戦術は社会的アイデンティティに個人的アイデンティティを重ね合わせる戦術で、「司祭と個人のアイデンティティの統合」「個人的アイデンティティの根幹に神への献身を位置づける」などの仕方で行われる。中立的／二重機能の戦術は「司祭の職務からの断続的な離脱と休息による個人的アイデンティティの回復」などの仕方で、両アイデンティティを維持しながら緊張感を緩和する戦術である。

なお、これらのアイデンティティ・ワーク戦術が必ずしも効果的とは限らない。Ibarra & Barbulescu (2010) は役割移行プロセスが成功しやすい条件としてナラティブに「構造的に首尾一貫したプロット」があること、「既存の文化的アーキタイプ」を含んでいること、「オーディエンスを巻き込」んでいることなどを挙げているが、条件が合わない場合には「最適バランス」が達成されない場合もありうる。

3. 芸術家のアイデンティティ・ワーク

芸術家はどのようなアイデンティティ・ワークを行うのだろうか。本章ではアイデンティティ・ワーク概念を芸術家のアイデンティティに当てはめ、芸術家アイデンティティをめぐるアイデンティティ・ワークの誘因と引き金、プロセスがそれぞれどのようなものであると考えられているかを芸術社会学を中心とした先行研究から論じる。本稿は芸術におけるアイデンティティ・ワークの網羅的な説明ではないが、以下ではいくつかの断片的なケーススタディを用いて芸術生産に内在する多様なワークの契機やプロセスの一端を明らかにしたい。

3.1 誘因

芸術家にとって以下のような「異なる領域」の間を航行することはキャリア構築のために必須であるとされる（Lingo & Tepper 2013: 337）。

1. 専門家としての能力／ジェネラリストとしての能力
2. 自律的活動志向／ソーシャル・エンゲージメント志向
3. 経済やアート・ワールドの中心での活動／周縁での活動
4. 不安定な被雇用状態／起業家的な活動

異なる領域を同時に志向する「アイデンティティ構築を方向付ける力」（Vignoles et al. 2006）が芸術家のキャリア

ア構築に求められているのだとすると、芸術家は恒常的に「最適バランス」(Kreiner et al. 2006)を模索するアイデンティティ・ワーク状態にあると言える。

「誘因」という視点からこれらの相反する力は以下のように読むことができる。

1. 他職種に対する「弁別性（差異の強調）」とアート・ワールド全体への「所属感」の対立
2. 地域社会に対する「弁別性（卓越化の志向）」と「所属感」の欲求の対立
3. アート・ワールドの正当な成員であると感じる「本来感」と自身が周囲に影響を与えていると感じる「効力感」の対立
4. 芸術家をめぐる「神話」を前提とする「本来感」と自分のキャリアに対する「効力感」の対立

また、このように活動全体を通じて様々な領域で分裂を経験することは「連続感」「首尾一貫性」「意味」といった誘因を刺激すると考えられる。芸術家の一般的な特徴に相反する誘因が読み取れるということは、芸術家のキャリアを通じてアイデンティティ・ワークが重要な役割を担っている可能性を示唆している。

3.2 引き金

芸術家の経済的側面への着目はいくつかの引き金の存在を明らかにする。芸術家は専門家からジェネラリストになり、近年は起業家としての側面も期待されるようになってきているということはすでに指摘した。加えてHans Abbing (2002=2007: 18)が指摘した芸術の経済の二面性、「豪壮なオペラハウス、お洒落なオープニング、莫大な収入を得るアーティスト…裕福な寄贈者たちからなる華麗な世界」が存在する一方で「ほんのわずかな収入、あるいはまったく収入のない大多数のアーティストからなる世界」に大多数の芸術家が属しているという状況も考察されなければならない。同じ「ジェネラリストの起業家」としての芸術家も、住む世界が違えば異なる引き金に直面するからである。

ロマン主義が広がる19世紀初頭に芸術家は自らを反商業主義的な社会的アウトサイダーとして位置付けるようになり(Røyseng et al. 2007)、社会も経済的利益を否定する芸術家に正統性を見出した。また、「芸術のための芸術」の生産が芸術界における威信を集める策として有効な場合があった(Bourdieu 1983=1993)。この反経済的な傾向と呼応するように、芸術家は多くの場合、低賃金労働に従事するポスト・フォードイズム経済の被害者として描かれてきた(Lingo & Tepper 2013)。近年では以前のように経済的領域で活動することが正統性を毀損するものではなくなってきたとされている(Bridgstock 2013)。その結果、魅力的なポートフォリオを持つ個人が創造的ビジョンを具現化し、マーケットを利用するためにサービス提供者を雇う構図が頻繁に見られる(Lingo & Tepper 2013: 345)。「ポートフォリア・キャリア」を歩むためには創作以外に起業家的なマネジメント能力が必要になる。このような教育を受けられ、華麗な世界の一員となる一歩目を踏み出せる芸術家がいる一方、既存の格差を拡大させる効果も指摘されている(Frenette 2017: 1458)。

多くの芸術家は今でもプレカリアートとして生きている。Pierre-Michel Menger (1999: 548)は長期雇用が通常大組織に限られ、芸術家の多くは不安定で流動的な雇用状況、特に能力は高い労働者による単発的な雇用の増加、というパラドキシカルな状況に陥っているとし、理由として以下の4点を指摘している。

1. 「オリジナルであらねばならない」という圧力と、反対に「他者との差異が特定の基準において、同一の指標で測れなければならない」という圧力の二つの相反する力が存在するため、芸術家は独占的生産者でありながら代替可能であるという独特の立場に立つことになるから
2. ほとんどの芸術形態は協同の結果として生産されるため、ある作品の一部を生産できるスペシャリストは流動的にプロジェクトを渡り歩くことになるから
3. 芸術受容者の趣味（テイスト）が常に不規則に変化するから
4. 創造はある程度の予測不可能性を孕むことがその魅力の一部であるから

1の理由は先述の「弁別性」と「所属感」の誘因の緊張に関係している。その時引き金となるのはいずれかの力が強まり、最適バランスが崩れるような「『強い』状況」であろう。また、2と3は「コンテクストの変化」の原因となる可能性がある。4はそのような不明瞭な状況で成功するという「本来感」の誘因に強く惹きつけられている状況である。4のような思いを持ちながらも芸術家としてプロになれていないような場合、「本来感」が損なわれる「『強

い』状況』に陥ると言えるだろう。

3.3 プロセス

芸術家のアイデンティティ・ワークには「複数の個人的、あるいは社会的アイデンティティのマネジメントのワーク」と「個人的アイデンティティと社会的アイデンティティの『最適バランス』の維持のワーク」のいずれのプロセスも見られる。

前者の例として反経済的に自立的芸術の制作を是とするボヘミアン・アイデンティティと商業的成功を目指すべきとする規範が内的な緊張関係を生むような場合がある (Beech et al. 2012: 39)。芸術にまつわる神話は強固な個人的アイデンティティを構築するために様々な形で流用されることは指摘されている (Bain 2005; Abbing 2002=2007)。しかし、大衆芸術とハイ・アートの境界がぼやけた現代芸術界でこのような神話を維持することは困難であることも指摘されている (Røyseng et al. 2007)。Lingo & Tepper (2013: 351) はこれらの芸術家が多くの場合キャリアを通じて神話を再解釈し、芸術家になるために必要な地道な労働や商業市場の価値などをより強調するようになるという。この解釈のとおりであれば、神話に基づいた個人的アイデンティティが「削除」もしくは起業家的な社会的アイデンティティに抵触しないように「区画化」されたと解釈することもできる。

キャリアコースを通じて芸術家としての進化と首尾一貫性を同時に主張する必要がある場合も前者のアイデンティティ・ワークが行われる。Hannah Wohl (2019) はニューヨークの現代芸術家へのインタビューを通じてキャリア段階が異なる作家 (個展を開く前の「新人」、複数の個展を経た「新進気鋭」、作風が広く認められている「確立」) による自作品の語り方の類型を示した。新人は「強い主張」で居場所の確保を行うが、新進気鋭や確立に分類される芸術家はそれぞれ「連なりとしての作風の提示」によるキャリア軌道の構築や、「作風との関連付け」による新たな作風への挑戦と確立した作風との両立といった、複数のアイデンティティの「統合」や異なるアイデンティティ同士の連関を強調する「集積」と解釈できるアイデンティティ・ワークを行っていた。

「最適バランス」の維持のワークは協同作業の現場で見られる。Lindgren & Packendorff (2007) はパフォーマンス・アーツの現場で、プロジェクトと個人の職業的アイデンティティが同時に協同構築されると主張する。協同構築のプロセスは「相互承認 (プロジェクトの要求が芸術家アイデンティティと整合的な場合)」、「同時承認/非承認 (芸術家が行いたい行為が芸術家アイデンティティには合致するが、プロジェクトを阻害する場合)」、「相互非承認 (想定外の事態によって要求されることが芸術家アイデンティティから逸脱する場合)」の3類型に分けられる。個人の視点から見ると、プロジェクトから様々な要求がなされる中で個人としての芸術家は「距離化」と「統合」の戦術を使い分けながら自身のアイデンティティの保持とプロジェクトの進行を両立させていると解釈することができる。

4. 芸術生産の形とアイデンティティ・ワーク

芸術生産の形の違いは経済的状況や他者とのかかわり方を大きく変えるため、目標とされるアイデンティティの形や経験するアイデンティティ・ワークのプロセスにも差異が生じると考えられる。

Pierre Bourdieu (1979=1990) は文化消費における個人の性向「ハビトゥス」と出身階級の間には一定の対応関係を指摘している。そのため、参与する芸術形式によってアイデンティティ・ワークのあり方には違いがあると思われる。「正統趣味」のハビトゥスを保持するものと「中間趣味」や「大衆趣味」を保持するもの間には特定の芸術形式に対する「本来感」やその芸術形式への継続的な参与によって引き出される「首尾一貫性」の感覚に違いがあることが考えられ、自身のハビトゥスと異なる階級に親和的な芸術形式に参与しようとする (大衆趣味のハビトゥスを持ちながらハイ・カルチャーの領域での活動を志向する場合など)、多くのアイデンティティ・ワークが必要となる。また、身体を用いた芸術形式においては階級などがより直接的に参入の困難さと結びつく。Friedman et al. (2017) の調査はイギリスにおいて俳優という職業へのアクセスが特権的階級に偏っていることを実証的に示している。労働者階級出身の俳優は特権的階級の出身者と同じ経済的、文化的、社会的資本にアクセスできないことで、職業上の困難への対処において不利な立場に追いやられているという。特に出身家庭の経済資本、標準発音の能力、類型的キャスティングに当てはまりやすい容姿などの条件が階級による選別に寄与している。

Bourdieu の芸術界をめぐる議論はその他の論点も提示する。Bourdieu (1983=1993; 1992=1995) によると「芸術界」は異なる資本構造とハビトゥスを持つ参与者同士の「象徴闘争」のアリーナである。ここで闘争は2つの「階層化の原理」である「自律的原理（芸術生産の場の内部で同業者からの威信をめぐる闘争）」と「他律的原理（芸術生産の場の外部からの威信、すなわち大衆芸術としての人気をめぐる闘争）」のいずれかに基づいて行われる (Van Maanen 2009: 65; Bourdieu 1983=1993: 37-40)。闘争は芸術生産の資源が豊富にある芸術家と限られた資源でやりくりしなければならない者、あるいは威信をすでに手にしているベテランと今からその椅子を狙う若手の間で、芸術の正統な定義を巡って行われる。場のどの闘争に、どの立場で参与するかによってアイデンティティ・ワークのあり方は大きく変わる。垂直的な象徴闘争を行う芸術家は「神話」に基づいたストックな芸術家アイデンティティの構築を孤立的に行っていた (Bain 2005)。一方、水平的な象徴闘争に参与するイラストレーターにとっては、「欲望の眼差し」をいかに集め、作品の商業的価値を上げるかが問題となる (吉田 2007)。ここでは芸術家としての個人的アイデンティティと期待される仕事を両立させるためのアイデンティティ・ワークが発生する。商業芸術家の場合には自身の創造性を最大限発露させることなく、「自分の才能で彼等 [著者注：クライアントなど] の『問題を解決している』という認識」 (吉田 2007: 11) がアイデンティティ・ワークの成功を示す。

協同の違いもアイデンティティ・ワークの形に影響を与える。Howard Becker (1982=2016) は芸術は必ず協同的に制作されると主張したが、協同性の性質や度合いも芸術形式によって変化する。例えば、絵画や彫刻などは材料の調達と作品の流通の間の制作は一人で行うことも多いが、演劇や映画では制作プロセスの各段階に多数の専門家が関わるのが不可欠であり、それはアイデンティティ・ワークの違いとしても経験される。視覚芸術家はほとんどの作業を一人で行うため、日常的な相互行為を通じた職場文化が形成されず、その代替物として芸術家をめぐる「神話やステレオタイプ」がキャリア構築する道標となる (Bain 2005: 39)。一方、集団での芸術生産には異なるアイデンティティをめぐる力学が観察される。Beech et al. (2012) で描かれるオペラの稽古においては様々な役割の個人が自身のアイデンティティと野心に基づいて行動し、現場の秩序が作られる。対立が起きた際には当事者の双方が事態の「再物語化」を行い、解釈の正当性を主張するというアイデンティティ・ワークが行われる。それぞれの新たなナラティブの成功は座組みの関係性の中でどちらの物語が受け入れられるかによって決定される。

長期的な集団維持においては集団的アイデンティティの維持という別の問題が発生する。佐藤郁哉 (1999: 305-320) によると日本の小劇場劇団は「少人数の芸術家が一時的な協同作業のために結成する『集団』を一つの理想としながらも」、歴史的経緯から多元的アイデンティティ (経営組織・組合・互助的共同体・教育機関) をもつ固定成員による半永続的組織「たらざるを得なかった」。小劇場での短期公演から大劇場での長期公演への移行を目指す「小劇場すごろく」モデルでの成功を目指していたこれらの劇団は規模を拡大しながら複数の役割を両立できなくなっていった。この団内資源の不足から経営が破綻する現象を佐藤 (1999) は「小劇場のディレンマ」として概念化している。

都市と芸術の関係もアイデンティティ・ワークに影響を与える。Lingo & Tepper (2013: 346) は大都市が「教育水準の高い大きな観客集団と堅牢なアート市場を持ち、文化生産者と多くの芸術プロジェクトの雇用のネットワークの「凝集効果」を持っていることが実際に食べていくことを相対的に容易にすることに加えて、「都市のアウトステータス」が承認を集める上で象徴的な効果を持つことを指摘している。形式によっては都市での活動が継続に不可欠とされるような場合もある。田村公人 (2015) によると東京に実家があり、友人関係などのネットワークがチケットの販売に有利に働くことで演劇人としての活動の継続に寄与するとした。

一方で、多くの芸術家は周縁的な都市、あるいは都市を離れて芸術生産を行っており、Lingo & Tepper (2013: 346) はこれを21世紀の芸術労働を特徴づける傾向であるとしている。どのような象徴闘争に参与するかと関連して、大都市で活動するか否かという芸術家の選択は相対的な職や威信の調達と生活のしやすさという環境の違いから、アイデンティティ・ワークにおいて問題となることが異なる結果につながると考えられる。

成功の度合いもアイデンティティ・ワークに影響する。Danielle J. Lindemann (2013: 471-473) はアメリカ・カナダで芸術の学位を受けながらも「未成功な芸術家志望者 (芸術からの収入を主な収入としていない者)」である人を対象に、キャリアを通じた芸術活動の多様性を描いている。志望者の多く (78%) はアマチュアとして芸術活動を続けており、ほとんどが何らかの形で芸術とのかかわりを継続していた。同様の例は高橋かおり (2019) が行った、

ヨーロッパで活動する音楽家を対象とした、「曖昧な芸術家」による芸術活動の継続に関する調査でも見られる。プロの団体（楽団）に所属し、芸術活動（演奏）で収入を得る、という目標に向かって活動を行う芸術家は競争の激しさに多くが「失敗」を経験する。しかし、成功のあり方を見直すことで彼らはアスピレーションを再加熱し「音楽を継続する」という大きな目的を維持しえたという。このように、多くの芸術家はアイデンティティ目標を完全には達成できず、アイデンティティ・ワークを通じた目標の修正を行うと考えられる。

5. おわりに——演劇人研究の方向性

これまでに挙げたいくつかの演劇人研究を含むパフォーマンスアーツを扱った先行研究（佐藤 1999; 田村 2015; Beech et al. 2012; Lindgren & Packendorff 2007）を踏まえて、アイデンティティ・ワークの視角は演劇人研究に有効であると主張する。これは演劇人研究においては4章で指摘した様々なアイデンティティ的困難の中でも、協同の形式、活動を行う都市の規模、成功の度合いといったテーマに独自の問題を孕んでいるからである。

まず、協同の形式が最も特徴的であろう。演劇を行うためには各段階での複数の専門家による協同が不可欠であり、そこにはプロジェクトの進行と芸術家としてのアイデンティティ構築・維持が対立すること（Lindgren & Packendorff 2007）や共同制作者間での対立と異なるナラティブの主張（Beech et al. 2012）といった様々なアイデンティティ・ワークをめぐるテーマが内包されている。日本の演劇の動向としては固定的な劇団組織以外の形での協同が模索されており（佐藤 1999）、これらのオルタナティブな活動によって起こる新たなアイデンティティ・ワークに関しても研究を進める必要がある。

日本の演劇はその多くが都市を中心に行われていることも一つの大きな特徴であり、田村（2015）が指摘するように都市の資源を利用できるか否かが演劇人としての活動の存続に直接的に関わる場合がある。一方で劇作家平田オリザが自身の劇団「青年団」とともに東京から兵庫県豊岡市に移住したケースに代表されるように（事業構想大学院大学 2019）、日本の演劇界でも中央集中的な体制が徐々に緩和しつつあると言われており、東京と地方における演劇人のアイデンティティ・ワークの違いも探求されるべきテーマである。

最後に、成功の度合いも演劇人のアイデンティティ・ワークをめぐる大きなテーマであると言える。前述の通り「小劇場のディレンマ」による劇団経営の圧迫が問題視されてきた小劇場においては大多数の参加者が余暇の時間で芸術に参加している。結果的に高橋（2015）が描くようなセカンド・ワークと演劇生産活動の両立が多くの演劇人に取って必須の活動となっている。「三〇代前後になって職場や家庭の責任が重くなってくる時期に解散の危機を迎える無数の劇団が存在していた」（佐藤 1999: 44）背景に芸術家としてのアイデンティティ・ワークの困難さがあったのは想像に難くないだろう。

本稿は上記のような演劇人研究の方向性を実証的に検討するための準備段階と位置づけられる。先行研究で語られたアイデンティティ・ワークのあり方が、芸術生産というある種の特殊性が存在する領域でどの程度応用可能か、また、もし演劇人のアイデンティティ・ワークに新たな特徴が見られるとすれば、それが既存のアイデンティティ・ワークの議論にどのように位置づけられうるのかが、今後の検討課題である。

6. 【文献】

- Abbing, Hans, 2002, *Why are artists poor?: The exceptional economy of the arts*, Amsterdam University Press（山本和弘訳, 2007, 『金と芸術——なぜアーティストは貧乏なのか?』 grambooks.）
- Bain, Alison, 2005, "Constructing an artistic identity" *Work, Employment and Society*, 19 (1): 25–46.
- Bauman, Zygmunt, 1988, *Freedom*, Open University Press.
- , 2004, *Identity*, Polity Press Ltd（伊藤茂訳, 2007, 『アイデンティティ』 日本経済評論社.）
- , 2007, "Liquid Arts" *Theory, Culture & Society*, 24 (1): 117–126.
- Becker, Howard Saul, 1982, *Art Worlds*, University of California Press（後藤将之訳, 2016, 『アート・ワールド』 慶應義塾大学出版会.）
- Beech, Nic, Charlotte Gilmore, Eilidh Cochrane & Gail Greig, 2012, "Identity work as a response to tensions: A re-narration in opera rehearsals" *Scandinavian Journal of Management*, 28 (1): 39–47.

- Bourdieu, Pierre, 1979, *La Distinction : Critique Sociale du Jugement*, Paris: Éditions du Seuil. (石井洋二郎訳, 1990, 『ディスタクシオン』藤原書店.)
- , 1983, "The field of cultural production, or: The economic world reversed" *Poetics*, (4-5): 311-356. (Richard Nice, trans., Randal Johnson ed., 1993, *The Field of Cultural Production*, Columbia University Press: 29-73.)
- , 1992, *Les Règles de L'art*, Paris: Éditions du Seuil. (石井洋二郎訳, 1995, 『芸術の規則 I・II』藤原書店.)
- Brewer, Marilynn B., 1991, "The Social Self: On Being the Same and Different at the Same Time" *Personality and Social Psychology Bulletin*, 17 (5): 475-482.
- Bridgstock, Ruth, 2013, "Not a dirty word: Arts entrepreneurship and higher education" *Arts and Humanities in Higher Education*, 12 (2-3): 122-137.
- Brown, Andrew D., 2015, "Identities and identity work in organizations" *International Journal of Management Reviews*, 17 (1): 20-40.
- Frenette, Alexandre, 2017 "Arts graduates in a changing economy" *American Behavioral Scientist*, 61 (12): 1455-1462.
- Friedman, Sam, Dave O'Brien, & Daniel Laurison, 2017 "Like Skydiving without a Parachute: How Class Origin Shapes Occupational Trajectories in British Acting" *Sociology*, 51 (5): 992-1010.
- Ibarra, Hermenia, & Roxana Barbulescu, 2010, "Identity as narrative: Prevalence, effectiveness, and consequences of narrative identity work in Macro work role transitions" *Academy of Management Review*, 35 (1): 135-154.
- 事業構想大学院大学, 2019, 「平田オリザ氏が地方に移住 豊岡を世界最大の演劇祭都市に」 *Project Design Online* (2020年9月3日取得, <https://www.projectdesign.jp/201909/area-hyougo/006827.php>)
- Kreiner, Glen E., Elaine C. Hollensbe, Mathew L. Sheep, 2006, "Where is the "me" among the "we"? Identity work and the search for optimal balance" *Academy of Management Journal*, 49 (5): 1031-1057.
- Lawler, Steph, 2015, *Identity: Sociological Perspectives*. John Wiley & Sons.
- Lena, Jennifer C. & Danielle J. Lindemann, 2014, "Who is an Artist? New Data for an Old Question," *Poetics*, 43: 70-85.
- Lepisto, Douglas A., Eliana Crosina, & Michael G. Pratt, 2015, "Identity Work within and beyond the Professions: Toward a Theoretical Integration and Extension" *Management Faculty Publications*, 11-37.
- Lindemann, Danielle J., 2013, "What Happens to Artistic Aspirants Who Do Not 'Succeed'? A Research Note From the Strategic National Arts Alumni Project" *Work and Occupations*, 40 (4): 465-480.
- Lingo, Elizabeth L., & Steven J. Tepper, 2013, "Looking Back, Looking Forward: Arts-Based Careers and Creative Work" *Work and Occupations*, 40 (4), 337-363.
- Lindgren, Monica, & Johann Packendorff, 2007, "Performing arts and the art of performing: On co-construction of project work and professional identities in theatres" *International Journal of Project Management*, 25 (4): 354-364.
- Menger, Pierre-Michel, 1999, "Artistic Labor Markets and Careers" *Annual Review of Sociology*, 25 (1): 541-574.
- Pratt, Michael G. & Peter O. Foreman, 2000, "Classifying managerial responses to multiple organizational identities" *Academy of Management Review*, 25 (1), 18-42.
- Røyseng, Sigrid, Per Mangset & Jorunn Spord Borgen, 2007, "Young Artists and the Charismatic Myth" *International Journal of Cultural Policy*, 13 (1): 1-16.
- 佐藤郁哉, 1999, 『現代演劇のフィールドワーク——芸術生産の文化社会学』東京大学出版会.
- Sveningsson, Stefan & Mats Alvesson, 2003, "Managing managerial identities: Organizational fragmentation, discourse and identity struggle" *Human Relations*, 56 (10): 1163-1193.
- 高橋かおり, 2015, 「社会人演劇実践者のアイデンティティ——質の追及と仕事との両立をめぐる」『ソシオロギス』(39): 174-190.
- , 2019, 「芸術に関わり続ける工夫——在外芸術家の経験の分析を通じて」『中京大学大学院社会学研究科 社会学論集』18: 67-89.
- 田村公人, 2015, 『都市の舞台俳優たち——アーバニズムの下位文化理論の検証に向かって』ハーベスト社.
- Taylor, Stephanie, & Karen Littleton, 2008, "Art work or money: Conflicts in the construction of a creative identity" *Sociological Review*, 56 (2): 275-292.
- Van Maanen, Hans, 2009, *How to Study Art Worlds*, Amsterdam University Press.
- Vignoles, Vivian L., Camillo Regalia, Claudia Manzi, Jen Gollledge & Eugenia Scabini, 2006, "Beyond self-esteem: Influence of multiple motives on identity construction" *Journal of Personality and Social Psychology*, 90 (2): 308-333.
- Wohl, Hannah, 2019 "Creative visions: Presenting aesthetic trajectories in artistic careers" *Poetics*, 76: 1-13.
- 吉田光宏, 2007, 「アメリカ北東部における商業芸術家達のアイデンティティ形成の政治性」『神田外語大学紀要』(19): 109-129.

注

- 1 Becker (1982 = 2016) の概念。「人々の協同的な行為が、ものごとを行う規則になった手段についての人々の連携し合った知識によって組織化」(Becker 1982=2016: xxiv) したものと定義され、芸術は必ずアート・ワールドの協同によって作られるとした。芸術(家)の定義は特定のアート・ワールドにおける合意として決められるためアート・ワールドによって異なる。

Artists and Identity Work: Theoretical Preparations for a New Directions in Studies of *Engekijin*

SHIBATA Junro

Abstract:

Utilizing the concept of 'identity work,' This paper articulates differences in establishing and maintaining artist identity in various artistic production forms. The study serves as theoretical preparation for upcoming empirical research on identity work among Japanese fringe theatre artists (*engekijin*), known for their distinct artistic and lifestyle choices. To this end, that delineate the process of prior literature on identity work is reviewed for important concepts constructing and maintaining identity. Such concepts include 'identity motives,' 'identity triggers,' and personal and social identities. Next, referencing extant empirical research in the sociology of art, the paper examines how artists that pursue various forms of production experience identity instability differently and confront it through identity work. Results show that different forms of artistic production call for different forms of identity work unique to their contexts. Finally, issues inherent in the identity work of *engekijin* are detected, including their characteristic form of artistic cooperation, the effects of urban environments, and the question of success. The paper maintains that these points suggest a viable new direction in future *engekijin* research.

Keywords: Identity work, artists, *engekijin*

芸術家とアイデンティティ・ワーク ——新たな演劇人研究に向けた理論的準備——

柴田 惇 朗

要旨:

本稿は「アイデンティティ・ワーク」の視角から、来たるべき実証研究のために、芸術家アイデンティティの確立・維持プロセスが芸術生産の形による違いを明らかにすることを目的とする。そのため、まずアイデンティティ・ワークの先行研究を用いて、一般的なアイデンティティの構築・維持プロセスにおいて重要な概念として「誘因」「引き金」、および個人的・社会的アイデンティティをめぐる二種類のアイデンティティ・ワークの類型を抽出した。次に芸術社会学の先行研究に依拠し、芸術家がアイデンティティの不安定とその乗り越えをどのように経験しているかをアイデンティティ・ワークの視点から検討した。その結果、芸術生産の形の違いによって異なるアイデンティティ・ワークが要請されることを示した。最後に演劇人という特定の芸術形式におけるアイデンティティ・ワークに固有な問題を提案し、今後の演劇人研究における一つの方向性を提示した。

